FOREIGN BODIES IN EAR, NOSE AND THROAT SEEN AT MUSASHINO RED CROSS HOSPITAL DURING LAST 10 YEARS.

By

Y. TORIYAMA T. TAKEDA N. SAEGUSA M. NAGAKURA AND K. GOTO

*From the Department of Oto-Rhino-Laryngology,
Musashino Red Cross Hospital.*

During last 10 years in Musashino Red Cross Hospital, there was 413 cases of foreign bodies. The total number of the patient during that period was 44,061, and the foreign body cases were 0.934%.

The location of the foreign bodies in 413 cases were as follows;

ear	200 cases (48.4% of all foreign bodies)
nose	53 cases (12.8%)
oralcavity	1 cases (0.24%)
pharynx	98 cases (23.7%)
larynx	14 cases (3.3%)
esophagus	42 cases (10.1%)
trachea	5 cases (1.2%)

Among the cases of foreign. bodies in the ear and nose, 84 cases were unknown foreign bodies of which the patient did not realize the intrusion. Fifty-seven cases were in the ear, and among the 57 cases, middle ear complication was seen in 12 cases, intra-cranial complication occurred in 5 cases. Four cases among the 5 were with central perforation.

Among the 5 cases of foreign bodies in the nasopharynx, the fact that 4 cases were due to pine-tree leaves would seem to have some bearing upon the matter of nasopharynx foreign bodies.

武蔵野赤十字病院耳鼻咽喉科における 10 年の異物の統計的観察

武蔵野赤十字病院耳鼻咽喉科

鳥山寧二・武田亨・三枝直砥
トリヤマ ネジ タケダ ケイ サエグサ ナガクラ ト
長倉政行・五島一吉
ナガクラ マサ ユキ ゴトウ カズ ヨシ

目 次

A. 緒 論

B. 綜 論

I 年代別の推移

II 年令, 性別

III 発生部位の比率

C. 各 論

I 耳 異 物

1. 年代別推移

2. 年令, 性別発生数

3. 耳異物の種類

4. 無自覚性耳異物

5. 異物による中耳炎合併症

6. 稀 少 例

7. 耳異物の総括

II 鼻腔異物

1. 年齢, 性別発生数
2. 鼻腔異物の種類
2. 無自覚性鼻腔異物
4. 稀 少 例
5. 鼻腔異物の総括

Ⅲ 咽 頭 異 物

Ⅳ 上咽頭異物

Ⅴ 口 腔 異 物

Ⅵ 喉 頭 異 物

Ⅶ 気管, 気管枝異物

Ⅷ 食 道 異 物

Ⅸ 無自覚性異物

Ⅹ 食餌性異物

D. 文献的考察

E. 結 語

A. 緒 論

昭和24年12月武蔵野赤十字病院に耳鼻咽喉科が新設されてより早くも10年の歳月が流れた。この間病院自体も昭和25年50床の小規模で発足したが遂次増大し現在では特殊病棟を合せ638床の大となつた。耳鼻咽喉科も又年毎に外来患者数の増加をみ、その間種々の稀少な症例もあり、この10周年をきかいに各種の統計をまとめてみたが、こゝでは異物症例の統計を記載してみる。

異物統計については、戦前はむろん、戦後においても多数の報告がなされているが、その多くは大学の耳鼻咽喉科学教室の行蹟であり、その他は数編の主要病院の報告がみられる丈である。又気管・食道異物については戦後非常に多数の統計が報告されているのをみる。

B. 綜 論

昭和24年12月20日に耳鼻咽喉科が当院に新設せられてより昭和34年12月31日迄の略10カ年間の全患者数は44,061名であり、全疾患数は71,065に達した。このうち異物症例は413例、401名であつた。これは全患者数の0.934%であり、又全疾患数の0.581%になる。以下の統計では便宜上昭和24年12月分は昭和25年分に入れて計算する。

I 年代別の推移

全異物症例を表示してみると第1表の如くなる。最多数は昭和31年の56例、最少数は昭和32年の26例である。しかし、各年間の比率では大した変化をみることはできない。又各年の発生率でも認むべき変化はなかつた。又表示の各部位における年次発生頻度を比較すると、上咽頭、気管・気管枝異物を除けば、多少の変化はあるが、特に年次的変化を示す部位はない。たゞ上咽頭異物は昭和30年より1〜2例宛あり、気管・気管枝異物は昭和31年よりみられ、硬口蓋の異物は33年度に1例をみた丈であつた。

II 年齢・性別

異物の発生年齢・性別をみると、第2表の如く、2〜4才の78例を最高に、次いで20才台67例、10才台65例、30才54例、5〜9才台49例、40才39例、0〜1才台、及び50才以上20例、60才台16例、70才台1例、80才以上4例という数ができる。こゝで2〜4才台のピークは注目に値し、又0〜9才が147例を占め、10〜30才が186例となり、幼年が35.4%を占め、0〜30才で80.8%になつている。男女の性別をみると、男子202、女子

第1表 (男, 女, (合計) の順)

	耳	鼻	口	上咽	咽	喉	気	食	計
25	11, 8, (19)	1, 2, (3)			3, 5, (8)				15, 15, (30)
26	4, 20, (24)	4, 6, (10)			2, 5, (7)				10, 31, (41)
27	16, 14, (30)	6, 2, (8)			3, 4, (7)	1, 3, (4)		2, 3, (5)	28, 26, (54)
28	15, 11, (26)	1, 2, (3)			6, 0, (6)	1, 0, (1)		3, 1, (4)	26, 14, (40)
29	9, 10, (19)	0, 2, (2)			7, 5, (12)	0, 1, (1)		2, 0, (2)	18, 18, (36)
30	7, 7, (14)	2, 2, (4)		1, 0, (1)	11, 5, (16)	2, 0, (2)		3, 2, (5)	26, 16, (42)
31	16, 10, (26)	2, 4, (6)		0, 2, (2)	4, 7, (11)	0, 2, (2)	1, 0, (1)	4, 4, (8)	27, 29, (56)
32	6, 4, (10)	1, 4, (5)		1, 0, (1)	2, 2, (4)	1, 2, (3)		2, 1, (3)	13, 13, (26)
33	7, 9, (16)	1, 5, (6)	1, 0, (1)		4, 6, (10)		1, 1, (2)	4, 6, (10)	18, 27, (45)
34	9, 7, (16)	3, 3, (6)		0, 1, (1)	2, 10, (12)	1, 0, (1)	1, 1, (2)	5, 0, (5)	21, 22, (43)
計	100, 100, (200)	21, 32, (53)	1, 0, (1)	2, 3, (5)	44, 49, (93)	6, 8, (14)	3, 2, (5)	25, 17, (42)	202, 211, (413)

第 2 表

	0～	2～	5～	10～	20～	30～	40～	40～	60～	70～	80～	計
耳	2, 0, (2)	10, 11, (21)	18, 16, (34)	25, 23, (48)	16, 15, (31)	14, 20, (34)	7, 10, (10)	4, 4, (8)	4, 0, (4)		0, 1, (1)	100, 100, (200)
鼻	2, 5, (7)	16, 22, (38)	2, 2, (4)	0, 1, (1)	0, 1, (1)	0, 1, (1)	1, 0, (1)					21, 32, (53)
口				1, 0, (1)								1, 0, (1)
上咽	1, 2, (3)	1, 1, (2)										2, 3, (5)
咽	0, 2, (2)	1, 2, (3)	3, 5, (8)	7, 4, (11)	16, 11, (27)	6, 8, (14)	6, 7, (13)	1, 5, (6)	4, 2, (6)		0, 3, (3)	44, 49, (93)
喉				0, 1, (1)	2, 2, (4)	0, 2, (2)	2, 1, (3)	0, 1, (1)	1, 1, (2)	1, 0, (1)		6, 8, (14)
気	0, 1, (1)	2, 1, (3)	1, 0, (1)									3, 2, (5)
食	4, 1, (5)	6, 5, (11)	2, 0, (2)	1, 2, (3)	3, 1, (4)	1, 2, (3)	4, 1, (5)	1, 4, (5)	3, 1, (4)			25, 17, (42)
計	9, 11, (20)	36, 42, (78)	26, 23, (49)	34, 31, (65)	37, 30, (67)	21, 33, (54)	20, 19, (39)	6, 14, (20)	12, 4, (16)	1, 0, (1)	0, 4, (4)	202, 211, (413)

211 と大差はない。又各年令台の男女の別をみると、30 才台において、女子が 33 例、男子 21 例と女子に 12 例多いことその他、多少の差はあるが、性別が特に目立つ年台はない。各部位での男女比をみると、差が目立つのは鼻・食道異物で、鼻腔では女子が 11 例多く食道では男子が 8 例多くなっているが、その他の部位では差がないといえよう。

Ⅱ 発生部位の比率

全症例 413 例の発生部位による分類は第 1, 2 表, 第 3 表, 第 1 図にあるように、耳異物は 200 例 (男 100 例, 女 100 例) 全異物症例の 48.426% を占め、10 年間の耳疾患数 25,144 の 0.79% である。鼻異物は 53 例 (男 21 例, 女 32 例) 12.832%, 全鼻疾患数 24,190 の 0.21% をしめる。口蓋異物は 1 例 0.242%, 全口腔疾患数 982 の 0.10% を示す。咽頭異物は 98 例—上咽頭異物 5 例を含む— (男 46 例, 女 52 例) で全異物の 23.728%, 全咽頭頭疾患数 18,181 の 0.53% である。喉頭異物は 14 例 (男 6 例,

第 1 図

女 8 例) 全異物の 3.389%, 全喉頭疾患数 1,616 の 0.86%, 気管・気管枝異物は 5 例 (男 3 例, 女 2 例) 全異物の 1.210%, 全気管疾患数 23 例の 21.7% とふえ、食道異物は 42 例 (男 25 例, 女 17 例) 全異物の 10.169%, 全食道疾患数 120 例の 35.0% となつている。後 2 者の疾患数に対する比率の著しく大であることは、当科においては、かゝる疾患部位では異物を主症状として来院するものが多いことを示している。

各部位における異物症例数は、耳・咽頭・鼻腔・食道・喉頭・気管気管枝・口腔の順序であり、各部位における異物の発生頻度は食道・気管気管枝・喉頭・耳・咽頭・鼻腔・口腔となつている。異物全体としてみれば全疾患数の 0.581% となることは前述した通りである。

C. 各 論

Ⅰ 耳 異 物

耳異物は 200 例あり、全耳疾患数 25,144 の 0.79% を示し、全異物 413 の 48.42% を占める。又異物は後述す

第 3 表

	症 例 数	異 物 の %	異物の発生率
耳	200	48.426	0.79
鼻	53	12.832	0.21
口	1	0.242	0.10
上 咽	5	1.210	} 0.53
咽	93	22.518	
喉	14	3.389	0.86
気	5	1.210	21.7
食	42	10.169	35.0
計	413		

るように、外耳道異物と考えてもよいものであるので、外耳疾患のみに限つてみると、9,640中260で、2.07%の高率を示している。これらの耳異物症例をみると、鼓膜に欠損、障害がないものに外的に異物が鼓室に侵入したものはみられなかつた。又慢性化膿性中耳炎等により、鼓膜穿孔があり、その穿孔を通じて鼓室あるいは鼓室後に異物が侵入した症例もみられなかつた。異物の一部分が鼓室に入っていたものはあるが、その性質上、外耳道異物といった方がよいと考え、以上の考察に際し特に区別はおこななかつた。

1. 年代的推移

耳異物の年代的推移は第1表に示めされるように、昭和30年の10例を最小とし、昭和27年の30例を最多としているが、特に目立つような変化はない。しかしながら、最近では漸減するかのような数値を示しているが、こ

れは今少し長い期間の観察を加えないと減少傾向にあるとは断言できない。とくに各年間に差をみとめないと考えた。

2. 年齢、性別発年数

各年齢層の耳異物発生数は第4表のようになり、発生分布の山は10台にあり、48例と最高を示し次いで5～9才台と、30才台の34例、20才台の31例となる。この5才～39才の間で全耳異物200例中の147例73.5%と大部分を占めている。又70才台は1症例もみられなかつた。

男女の性別による差異は著明でなく、全症例は100:100と全く同数を示し、年齢層との関連をみても、僅小の差位があるのみで、とくに何才台が優位にあると断言はできない。

第 4 表

	0～	2～	5～	10～	20～	30～	40～	50～	60～	80～	計
虫	2,0,(2)	1, 0, (1)	5, 4, (9)	11,15,(26)	8, 8,(15)	6,14,(20)	4, 6,(10)	2,1,(3)	1,0,(1)		40, 48, (88)
紙 片		0, 3, (3)	1, 6, (7)	4, 5, (9)	2, 2, (4)	3, 3, (6)		1,0,(1)		0,1,(1)	13, 19, (32)
綿 花		3, 1, (4)	2, 0, (2)	8, 2,(10)	1, 1, (2)	4, 2, (6)	1, 0, (1)	1,1,(2)	2,0,(2)		22, 7, (29)
種 子		1, 3, (4)	1, 1, (2)		2, 0, (2)						4, 4, (8)
豆		1, 2, (3)	2, 0, (2)			0, 1, (1)					3, 3, (6)
小 石			4, 1, (5)		1, 0, (1)						5, 1, (6)
ビーズ玉		1, 2, (3)	1, 1, (2)								2, 3, (5)
マツチ棒					1, 1, (2)		1, 1, (2)				2, 2, (4)
薬					0, 1, (1)		0, 3, (3)				0, 4, (4)
耳 撮 片				2, 0, (2)							2, 0, (2)
そばがら							1, 0, (1)	0,1,(1)			1, 1, (2)
毛 髪					1, 1, (2)						1, 1, (2)
ガ ラ ス									1,0,(1)		1, 0, (1)
粘 土						1, 0, (1)					1, 0, (1)
ガ ー ゼ					0, 1, (1)						0, 1, (1)
マツボツ				0, 1, (1)							0, 1, (1)
クリ											0, 1, (1)
消しゴム			1, 0, (1)								1, 0, (1)
錫 箔			1, 0, (1)								1, 0, (1)
クレヨン			0, 1, (1)								0, 1, (1)
藁 草 片			0, 1, (1)								0, 1, (1)
砂			0, 1, (1)								0, 1, (1)
チューイ		1, 0, (1)									1, 0, (1)
ンガム											
ボールペ		1, 0, (1)									1, 0, (1)
アリング											
鉛 筆 芯		1, 0, (1)									1, 0, (1)
計	2,0,(2)	10,11,(21)	18,16,(34)	25,23,(48)	16,15,(31)	14,20,(34)	7,10,(17)	4,4,(8)	4,0,(4)	0,1,(1)	100,100,(200)

3. 耳異物の種類

耳異物の種類は第4表に示すように最多数は虫——主に昆虫類殊に甲虫類——88例を最高に、紙片32例、綿花片29例、草木の種子8例、豆6例、小石6例、ビーズむ5例、以下表の如く、マツチ棒片4例、薬物4例、耳搔片3例、そばがら2例、ガラス、粘土、ガーゼ片、松笠片、消しゴム、錫箔片、クレヨン、蘭草片、砂、チューイングガム、ボールペアリングのボール、鉛筆芯の各1例となつている。動物性異物は90例、植物性85例、鉱物性25例であつた。昆虫類中多数を占める小甲虫を摘出標本によりしらべてみると、ヒメコガネ、サクラコガネ、アカビロードコガネ等の小型の甲虫が多く、大きいものではナミコガネ、クロコガネ、スズコガネ等もみられた。これら小甲虫以外は、蚊、蠅、蛾等があつた。

慢性化膿性中耳炎、耳湿疹に合併した異物には、紙

片、綿花がその大部分を占め、これらのほかには、耳搔片、葉、虫、豆などがみられた。

異物の種類と性別とをみて、その男女差の大きいものは綿花であり、29例中22例は男子であつた。しかし他のものでは性別により差があるとはいえない。

4. 無自覚性耳異物

10カ年間の異物統計をとつていて気付いたことは、耳異物の患者のうち、異物が入つたこと、あるいは異物を入れたことに気付かぬか忘れてし、異物が耳内にあるにもかかわらず何の自覚症を訴えず、難聴を訴え、時に耳漏を主訴としあるいは耳鳴のために来院して、異物を摘出されたものが多かつたことである。

そこでこのような異物を無自覚性耳異物と仮称して、集計、分類を試みてみた(第5表)。

耳異物200例中、無自覚性耳異物とみられるものは57

第 5 表

	0～	2～	5～	10～	20～	30～	40～	50～	60～	計
綿 花		2, 1, (3)		7, 2, (9)	0, 1, (1)	3, 1, (4)	1, 0, (1)	0, 1, (1)	1, 0, (1)	14, 6, (20)
紙 片			1, 2, (3)	5, 1, (6)	2, 2, (4)	1, 2, (3)		1, 1, (2)		10, 8, (18)
ガ ー ゼ					0, 1, (1)					0, 1, (1)
マ ツ チ 棒					1, 0, (1)					1, 0, (1)
そばがら								0, 1, (1)		0, 1, (1)
虫		2, 0, (2)		3, 1, (4)		0, 1, (1)				5, 2, (7)
種 子			1, 1, (2)							1, 1, (2)
小 石			2, 1, (3)							2, 1, (3)
ビーズ玉			0, 1, (1)							0, 1, (1)
砂			0, 1, (1)							0, 1, (1)
けしゴム			1, 0, (1)							1, 0, (1)
豆		0, 1, (1)								0, 1, (1)
計		4, 2, (6)	5, 6, (11)	15, 4, (19)	3, 4, (7)	4, 4, (8)	1, 0, (1)	1, 3, (4)	1, 0, (1)	34, 23, (57)
全耳異物	2, 0, (2)	10, 11, (21)	18, 16, (34)	27, 21, (48)	16, 15, (31)	14, 20, (34)	7, 10, (17)	4, 4, (8)	4, 0, (4)	100, 100, (200)

例あり、28.5% 約 1/3 を占め、この頻度の大きいことは注目される。このような無自覚性耳異物の種類と年令的關係は第4表に示されるが、年令的分布では幼小児に多く、成人以後に少なくなつてゐることである。4才迄の耳異物23例中無自覚のものは6例26.08%、5～9才では34例中11例32.35%、0～9才でみると、55例中17例30.90%を示している。10才台では、48例中19例39.58%、20才台31例中7例22.58%、30才台34例中7例、20.55%、40才台17例中1例5.87%、50才台8例中4例50%、60才台4例中1例25%となつてゐる。10才台迄

が多く——36例——20才台以後激減している。

無自覚性耳異物の種類としては、綿花20例、紙片18例、虫7例、小石3例、種子2例、マツチ棒、ビーズ玉、ガーゼ片、豆、砂、そばがら、消しゴム、等の各1例がある。

主なものの綿花についてみると、無自覚性耳異物の34.3%を占め、又綿花耳異物29例の68.9%に達している。この20例中14例に慢性化膿性中耳炎があり、更にこの14例中9例が急性増悪と共に何らかの中耳炎合併症をおこしたものである。

紙片についてみると、紙片耳異物 32 例中の 18 例 56.2% が無自覚性のものであった。この 18 例中慢性化膿性中耳炎を併うものは 6 例あり、このうち何らかの中耳炎合併症をおこしたものは 4 例であった。これら無自覚性異物による慢性化膿性中耳炎の合併症の発生については別項で改めて論ずることにする。

第 5 表をみて気付くことは、異物の種類と年齢との関係であろう。種子、小石、ビーズ玉、消しゴム等遊び道具となるようなものはすべて 9 才以下にみられ、これ等が 11 例あり、同年台の無自覚性耳異物 17 例の 64.4% にもなっていることである。又同じ 9 才台以下では、治療、掃除等に使われたと解される紙片、綿花は各々 3 例づゝであり、無自覚紙片異物 18 例の 1/6、綿花 20 例の 1/6 弱という少ない数である。これに反し、10 才以上になると、おもちゃにして、あるいはいたづらして入れたと考えられるものは全くないといつてよく、治療、掃除に使ったと考えられる紙片 15 例、綿花 17 例、マッチ棒、ガーゼ片、各 1 例が上げられ、又自然に耳内に入つたものとしては、虫 5 例、そばがら 1 例といった結果を示している。

綿花、紙片の無自覚性耳異物が 10 才台にて 15 例と最高を示し、この 2 者の無自覚性異物 36 例の 44.7% を占めることも注目される。

性別では男子 34 例女子 22 例と男子が多くなっている。この差の大部分は 10 才台の性別より生じたもので、そのほかの年齢では性別に大差はない。

5. 異物による中耳炎合併症

10 カ年間の中耳炎合併症は上鼓室化膿症・仮性真珠腫形成症のあるもの 35 例、中心性穿孔を有する慢性化膿性中耳炎 14 例、急性化膿性中耳炎 3 例の計 52 例であった。これらのうち、頭蓋内合併症をおこしたものは、上鼓室化膿症・仮性真珠腫形成症 7 例、中心穿孔性中耳炎 4 例の 11 例をみた。

これら 52 例中異物が存在しているのを確めたものは上鼓室・真珠腫に 3 例——すべて無自覚性——中心穿孔型に 11 例——うち無自覚性 9 例——の 14 例があつた。

こゝで注目されることは、上鼓室型で 38 例中 3 例の異物数であるのに中心穿孔型では 14 例中 11 例 78.5% と著しく異物をもっているものが多いことである。

これら異物が存在していた症例は、少くとも中心穿孔性慢性化膿性中耳炎においては合併症惹起の原因と解してもよいと考えられる。この 14 例は綿花 10 例、紙片 4 例で、それぞれの 34.4%、12.5% を占めている。

この 14 例中無自覚性耳異物は 12 例あり、異物に気付いていたのは 2 例にすぎない。この 2 例は綿花、紙片の各 1 例で、共に大したことがないのでほつてをいたと言つていた。この無自覚性耳異物 12 例（合併症をおこしたものの 85.7%）は綿花 9、紙片 3 症例であり、このうち 9 例までが中心穿孔性中耳炎であり、上鼓室・真珠腫型は僅かに 3 例にすぎなかつた。これらのうち頭蓋内合併症をおこしたのは 5 例であり、残りの 7 例は、外耳道骨膜炎下膿瘍、乳突炎、内耳炎等をおこしたもので、上鼓室・真珠腫型 2 例——綿花 1 例、紙片 1 例——中心穿孔型 5 例——綿花 4 例、紙片 1 例——の綿花 5 例、紙片 2 例であつた。

一方頭蓋内合併症は 10 カ年間に 11 例がみられ、このうち上鼓室・真珠腫型は 7 例、中心穿孔型 4 例であつた。この 11 例中、異物があつたものは 5 例 48.1% とは半数を占める。すべて無自覚性異物であつたことゝ共に注目に値し、更に中心穿孔型 4 例では、全例に異物の存在があつたことは重要である。上鼓室・真珠腫型で異物があつたのは 1 例にすぎなかつた。この 5 例は綿花 4 例紙片 1 例であつた。

異物によつておこつた頭蓋内合併症 5 例は全頭蓋内合併症の 48.1% にあたり、しかもこのすべてが無自覚性耳異物によりおこつていることに注目される。しかもこの 5 例中 4 例迄が中心穿孔性中耳炎であり、これが合併症の 36.3% を占めている。

全例を通じ異物が、綿花・紙片であつた点は我々に一考をうながすものである。

6. 稀 少 症

耳異物 200 例中より比較的稀と考えられる症例をとりあげてみると、

1. ガラス異物

66 才男子で、第二次大戦中空襲にあり、窓ガラスが耳に刺入した。大部分は除去したが、その一部が外耳道後壁より耳後部皮下に埋没し、8 年間放置された後に摘出したもの。

2. 重複異物

30 才女子で、左慢性化膿性中耳炎があつたが、家事中左耳に小豆が入つたゝめに来院したもので、左耳をみると小豆が入口部に介在し、これを除くと更に蠅の死体があり、これを摘出するとそのおくに新聞紙の一片が入つており、これを除いて始めて鼓膜の全様がみられたもので、中心性穿孔ある慢性化膿性中耳炎急性増悪性をきたしたものであつた。この異物の後 2 者は、いう所の無

自覚性異物であり、その成立機転は恐らく、耳掃除に使った新聞紙片の残留に気付かずにいるうち、耳漏にひかれた蠅が睡眠中にでも耳内に入りこみ、そのまゝ死んでしまい、更に小豆が入ったために治療を求めて来院したものであろうと考える。

耳異物 200 例中唯一の重複異物であり、又無自覚性のものと、自覚したのとの混在の点でも興味あり、文献的にみても 3 種の異物が同一耳に迷入したものは稀らしいと考える。

3. 両耳無自覚性異物

2 才女子にみられたもので左耳に綿花、右耳に新聞紙片が迷入していたものである。両外耳道に湿疹があり、親の不注意のためにおこったか、或は自分で入れたものかは断言できない。

7. 耳異物の総括

集まった 200 例の耳異物症例をみると、耳にはいりそうなものはまずあるようである。しかし大別して、人為的に入れたものと向うから侵入してきたものとの 2 つがあることは言うまでもないが、明らかに人為的に入れられたと考える綿花、紙片が 61 例もあることは、侵入したものと考えられる虫の 88 例と共に注目すべきことである。

一方おもちゃにしていって耳に入れてしまったと考えら

れる異物もかなりの数になり、しかも幼小児においてその大部分が無自覚性異物となってしまうことにも注意したい。

異物により慢性化膿性中耳炎が何らかの合併症をおこしたものは 14 例あり、そのうち 12 例は無自覚性異物であつた。又頭蓋内合併症をおこしたもののうち 5 例は異物によるものであつて、しかもこの慢性化膿性中耳炎中 5 例は中心穿孔性のものであつた。

Ⅱ 鼻腔異物

鼻腔異物は 10 年間に 53 例がえられ、全異物の 12,832 % を占め、異物中第 3 位に位している。男子 21 例、女子 32 例と女子に多少多い。この 53 例中、副鼻腔異物は上顎洞に入つた歯の 1 例のみで、あとの 52 例はすべて固有鼻腔のものであつた。全鼻腔疾患数 24,190 に対して、0.21% の発生率を示めし、固有鼻腔のみに限つてみると、0.308% となる。又各年間の推移はとりあげる程の変化を示さない。

1. 年齢、性別発生数

第 6 表に示されるように、鼻腔異物は圧倒的に 2～4 才に多く、この年代で 38 例あり鼻腔異物の 71.7% を占めている。又 10 才台以後は僅かに 4 例（男子 1 例、女子 3 例）しかなく、実に 93% は 9 才以下にみられている。しかも 0 才台にも多いことが注目される。

第 6 表

	0～	2～	5～	10～	20～	30～	40～	計
紙 片	1,1,(2)	3,13,(16)				0,1,(1)		4,15,(19)
種 子	0,1,(1)	1, 2, (3)						1, 3, (4)
木 の 葉	0,2,(2)	0, 1, (1)						0, 3, (3)
チューインガム		1, 0, (1)						1, 0, (1)
経 木		1, 0, (1)						1, 0, (1)
糸		1, 1, (2)						1, 1, (2)
ボ タ ン		1, 2, (3)						1, 2, (3)
綿 花		2, 1, (3)						2, 1, (3)
ガ ー セ 片		1, 0, (1)		0,1,(1)				1, 1, (2)
ホ ツ ク		1, 0, (1)						1, 0, (1)
玩 具 片		1, 0, (1)						1, 0, (1)
虫	0,1,(1)							0, 1, (1)
ビ ー ズ 玉	1,0,(1)							1, 0, (1)
歯					0,1,(1)			0, 1, (1)
竹 の 玉			1,0,(1)					1, 0, (1)
豆		3, 2, (5)	0,2,(2)					3, 4, (7)
計	2,5,(7)	16,22,(38)	2,2,(4)	0,1,(1)	0,1,(1)	0,1,(1)	1,0,(1)	21,32,(53)

男女の性別は、男子 21 例、女子 32 例で女子が 1.5 倍近く多くなっている。

2. 鼻腔異物の種類

鼻腔異物の種類は、第 6 表にあるように、最多数は紙片の 19 例、次いで豆 7 例、木の実 4 例、綿花、ぼたん、木の葉の各 3 例、糸塊、虫、ガーゼ、玩具片各 2 例、ホック、キョーギ、チューイングガム、ビーズ玉、歯、竹のたま、の各 1 例で、13 種がみつけられた。

第 6 表により、この異物の種類と年齢との関係を見ると、10 才以上の 4 例にみられたものは、ガーゼ片、葉、紙片、虫の 4 種各 1 例宛である。9 才以下では 2～4 才の 38 例（男子 16 例、女子 22 例）、を筆頭に 0 才 7 例、5～9 才 4 例となつてをり、丁度一人で遊び出す頃、又何でもいじりたがる頃に多発している。

3. 無自覚性鼻腔異物

耳におけると同様に、鼻腔の異物の介在を知らず、あるいは入れたことを自覚しないもの、無自覚性の鼻腔異物が、かなりあるのに気付いた。このようなものをまとめると第 7 表の如く 27 例（男子 11 例、女子 16 例）、鼻腔異物 53 例の 50.28% にも達している。

第 7 表

	0～	2～	5～	10～	計
紙 片	0,1,(1)	3, 8,(11)			3, 9,(12)
綿 花		2, 0, (2)			2, 0, (2)
ガーゼ片		1, 0, (1)		0,1,(1)	1, 1, (2)
糸 屑		1, 1, (2)			1, 1, (2)
木の葉	0,1,(1)	0, 1, (1)			0, 2, (2)
豆		1, 0, (1)	0,1,(1)		1, 1, (2)
経 木		1, 0, (1)			1, 0, (1)
竹の弾			1,0,(1)		1, 0, (1)
虫	0,1,(1)				0, 1, (1)
ボ タ ン		0, 1, (1)			0, 1, (1)
ビニール片		1, 0, (1)			1, 0, (1)
計	0,3,(3)	10,11,(21)	1,1,(2)	0,1,(1)	11,16,(27)

これら無自覚性鼻腔異物の大多数は 1 側鼻閉、悪臭鼻漏、不気嫌等の症状を示していた。

まず年齢的にみて気付くことは 10 才台 1 例を最年長とし、すべてがそれ以下におこつていことである。2～4 才台に圧倒的に多く 21 例（全無自覚性鼻腔異物の 77.7%）を占め、しかも鼻鼻異物の同年代の 55.26% に達している。次いで 0 才台 3 例、5～9 才台 2 例、10 才

台 1 例があつた。

この無自覚異物の種類は、紙片 12 例（鼻腔全紙片異物 19 例の 63.15%）、糸塊 2 例（100%）、ガーゼ片 2 例（100%）、綿花 3 例（66%）、木の葉 2 例（50%）、豆 2 例（22.22%）、経木（100%）、竹のたま（100%）、虫（50%）、ビニール おもちや片（50%）、ボタン（50%）の各 1 例宛である。

この年齢と異物の種類より推測しうことは、鼻腔の無自覚性異物の成立機序が、小さなもので遊んでいること、おもちゃにしていることと関連があるように考えられる。耳の無自覚性異物の場合とことなり、治療のためにおこつたと考えられるのは 10 才台の 1 例（ガーゼ片）丈であつた。

4. 稀 少 例

鼻腔異物 53 例中珍らしいと思えるのは、歯牙異物である。本症例は 20 才女子にみられたもので、16 歳の抜糸時に 16 の歯根が左上顎洞に陥入してしまつたものである。この例 10 年間に於ける唯一の副鼻腔異物でもあつた。

5. 鼻腔異物の総括

鼻腔異物は 10 年間に 53 例がえられた。年齢的にみて 10 才台以後は僅かに 4 例上げられるのみで、93% は 9 才以上にみられ、又 2～4 才台が 38 例 71.7% を占めている。しかも無自覚性異物は 50.28% と高率を示し、これも又 2～4 才台で同年代の鼻腔異物の 55.26% に達している。

鼻腔異物が幼児に多いことは論をまたないが、今 0～4 才台のすべての異物をみると、98 例になるが、そのうち 45 例は鼻腔異物で、45.8% にもなる。更に年齢をせばめ、2～4 才台に局限すると、全異物 78 例中 38 例 48.7% ほど半数が鼻腔異物で占められていることに気付く。これに反し、10 才台以後は僅かに 4 例あつた丈である。

副鼻腔異物は僅かに 1 例あつた丈であり、文献上比較的多い副鼻腔異物としての空気銃弾等もみられず、外傷性の鼻腔、副鼻腔異物とみなされるものもなかつた。

Ⅲ 咽頭異物

咽頭異物は 98 例が集められた。このうち 5 例は上咽頭異物であつて、これについては項を改めて記述することにし、こゝでは中咽頭以下の異物 93 例について考察を加えることにする。

咽頭異物 93 例は全異物の 22.518%、又全咽頭疾患数 18.181 の 0.53% にあたる。このうちわけは第 8 表に示すように、年齢的分布は 20 才台 27 例を最高に以下 30 才

第 8 表

	0～	2～	5～	10～	20～	30～	40～	50～	60～	70～	計 男 女	計
魚 骨		1,0,(1)	3,2,(5)	6,4,(10)	16,11,(27)	6,7,(13)	6,7,(13)	1,4,(5)	4,2,(6)	0,3,(3)	43 40	83
昆 布								0,1,(1)			1	1
貝 柱				1,0,(1)							1	1
妻 揚 子						0,1,(1)					1	1
麦 の 穂			0,3,(3)								3	3
薬		0,1,(1)									1	1
ひばの葉	0,1,(1)										1	1
釘		0,1,(1)									1	1
玩 具 片	0,1,(1)										1	1
計	0,2,(2)	1,2,(3)	3,5,(8)	7,4,(11)	16,11,(27)	6,8,(14)	6,7,(13)	1,5,(6)	4,2,(6)	0,3,(3)	44 49	93

台 14 例 40 才台 13 例, 10 才台 11 例, 5～9 才台 6 例, 50, 60 才台各 6 例, 2～4 才台 80 才台各 3 例, 0 才台 2 例となり, 耳, 鼻腔異物にくらべ, 頻度の山はずれて 20 才台になっている. 性別では男子 44 例, 女子 49 例と大差なく, 各年令層における性別も球にかわりはない.

又年令をみて気付くのは, 20 才以降が 69 例 74.2% と多数を占め, 10 才台以下は 24 例 26% と著しく少ないことである.

次に異物の種類をみると, 9 種類のものが上げられるが, このうち食餌性のものは 3 種類 (魚骨, 貝柱, 昆布) 85 例と 91.4% に達し, 植物性 (妻揚子, 麦の穂, 薬, ひばの葉) の 4 種 6 例, 鉦物性 (釘, ガラガラ破片) 2 種 2 例があつた.

この食餌性異物のうち魚骨は 83 例にも達しており, 20 才台が最高を示している. この骨質異物の存在部位は圧倒的に口蓋扁桃が多く, その他, 舌根扁桃, 口蓋弓部, 舌舌厭皺襞, 咽頭側壁, 舌口蓋皺襞, 梨子状窩附近等がみられた.

食餌性異物を除いた植物性, 鉦物性異物は, 妻揚子例を除去すればすべて 9 才以下の幼小児にみられたものであり, 麦の穂 3 例中 2 例は口蓋扁桃に, 1 例は軟口蓋に利入していた. 又ひばの葉は扁桃上葉に突入していたもので薬は咽頭側壁に, 釘は下咽頭にガラガラの破片は咽頭後壁にみられたものである.

このように食餌性のものが全年令層に見られたのは当然としても, その他のものが, すべて 9 才以下であつたことは注意すべきことと考える.

Ⅳ 上咽頭異物

上咽頭異物は 10 カ年間に 5 例あり, 全異物の 1.21%

第 9 表

	0～	2～4	計
杉 の 葉	1, 1, (2)		1, 1, (2)
ひばの葉	0, 1, (1)		0, 1, (1)
さわらの葉		0, 1, (1)	0, 1, (1)
桜 の 葉		1, 0, (1)	1, 0, (1)
計	1, 2, (3)	1, 1, (2)	2, 3, (5)

である. この 5 例は第 9 表のように, すべて木の葉であり, さくらの 1 例を除き針葉樹が 4 例である (杉 2 例, さわら, ひば各 1 例). しかもこの葉はとげあるいはひつつかりが一方をむいていることは注目される.

年令はすべて 4 才以下であつて, 男子 2 例, 女子 3 例であつた. この 5 症例では葉を喰べているのを親が見つけていた.

上咽頭異物は少ないものであるには違いないが, 臨床上是注意する必要があるものである. 文献より上咽頭異物をひろつてみたが, 18 例集めたえた丈であつた.

Ⅴ 口腔異物

全異物中僅かに 1 例 0.242% みられた. これは全口腔疾患の 0.10% にあたる.

10 才の男子でブリキ製の瓶の蓋のようなものをしやぶつているうちに, 硬口蓋部に密着しとれなくなつてしまつたものであつた.

このような例が文献上にも 1 例みえたことは興味があつた. しかし, よくみられるという唾液腺排泄管口への異物の刺入等は 10 カ年間全くみられなかつた.

Ⅵ 喉頭異物

喉頭異物は 14 例あり, 全異物の 3.389%, 全喉頭疾患

第 10 表

	10～	20～	30～	40～	50～	60～	70～	計
魚 骨	0,1,(1)	2,2,(4)		1,1,(2)	0,1,(1)	1,1,(2)	1,0,(1)	5,6,(11)
茶 の 葉				1,0,(1)				1,0,(1)
ミカンの皮			0,1,(1)					0,1,(1)
金 網			0,1,(1)					0,1,(1)
計	0,1,(1)	2,2,(4)	0,2,(2)	2,1,(3)	0,1,(1)	1,1,(2)	1,0,(1)	6,8,(14)

数の0.86%にあたる。年齢的には、第9表のように20才台4例を最多数とし、40才台3例、30才台、60才台各2例のほか、10才台、50才台、70才台各1例がある。9才以下には全くみられなかった。性別では男子6例、女子8例で大差はない（第10表）。

異物の種類は、魚骨が11例、78.5%を占め、あとは茶の葉、ミカンの皮、金網の破片、の各1例、がある。このミカンの皮例は、30才の女子にみられたもので、コップで水をのんでから嘔声、軽い呼吸困難があり、喉頭のガラス異物として紹介されたもので、間接喉頭鏡下に摘出してみたらミカンの皮の薄切であつたものである。

Ⅶ 気管・気管枝異物

第1表にみるように、当院における10カ年の前半には気管異物はみられなかった。後半に入り、第11表に示すように5例の気管枝異物がみられた。全異物の1.210%にあたり、全気管、気管枝疾患数の21.7%を占めている。年齢的にみればすべて9才以下の幼児であり、0才台1例、2～4才台3例、5～9才台1例となり、男子3例、女子2例であつた。

異物の種類としては南京豆2例、綿花、エンピツサツク、オガクズの各1例である。

摘出方法は全例共下気管切開を行い、気管切開口より下気管枝鏡下に摘出した。5例中オガクズ例1例が死

亡している。

介在部位は、南京豆2例は共に右気管枝に、エンピツサツクは左気管枝に、綿花は気管後壁に、オガクズは鼻・咽・口・喉頭・気管・両気管枝に及んでいた。

オガクズ症例は2才男子にみられたもので、子供達と一緒に風呂屋の燃料置場にあつたオガクズの山で遊んでいるうち、足をすべらし転び、足をとられて立てなくなつたようである。運悪く見付けののがおくれ、近くの医師に鼻・口腔のオガクズを除去してもらつたがまだ下方につまつていることを指摘され、当院におくられてきたものであつた。直ちに下気管切開を行うと共に下気管枝鏡下にオガクズの摘出を行うも、オガクズは両側気管枝中に充満してをり、遂に死亡したものである。

文献によるような異物症例があるかとしらべてみたが、よみえた文献中にはみあたらなかった。

Ⅷ 食道異物

第1表に示すように、食道異物は42例あり、全異物の10.169%、全食道疾患数の35.0%を占めている。

年代別にみれば第3年目より出ているが、各年毎にみて、特に変化はみられない。又年齢別にみると、2～4才台の11例が多いことが目立ち、あとは3～5例を上下している。性別では男子25例、女子17例と男子が多くなっている。

異物の種類をみると、第12表のように、魚骨11例（男子5例、女子6例）、鳥賊3例（男子1例、女子2例）、この他、牛肉片、煮干、餅片、海老、かきの殻、魚肉とのみこんだ釣針の各1例があり、更に、貨幣（10円男子4例、5円男子1例、女子2例、1円男子1例）の8例のほか針金、笛（ブリキ製）、ペン先、時計の齒車、待針、縫針、鉛筆サツク、釘、の各1例、ピン、画鋏、基石の各2例が上げられる。これら異物の種類と年齢層との関係をもとと何か関連があるようである。

異物のうち前段の食餌性のものは20例があげられる。

第 11 表

	0～	2～	5～9	計		計
				男	女	
南 京 豆	0, 1,(1)	1, 0,(1)		1	1	2
綿		0, 1,(1)			1	1
おがくず		1, 0,(1)		1		1
鉛筆サツク			1, 0,(1)	1		1
計	0, 1,(1)	2, 1,(3)	1, 0,(1)	3	2	5

第 12 表

	0～	2～	5～	10～	20～	30～	40～	50～	60～	計	
魚 骨				1, 1,(2)	2, 1,(3)	1, 2,(3)		0, 1,(1)	1, 1,(2)	5, 6, (11)	食 餌
鳥 賊							1, 0,(1)	0, 2,(2)		1, 2, (3)	
牛 肉							1, 0,(1)			1, 0, (1)	
煮 干							0, 1,(1)			0, 1, (1)	
餅								0, 1,(1)		0, 1, (1)	餌
海 老									1, 0,(1)	1, 0, (1)	
かきのから					1, 0,(1)					1, 0, (1)	性
釣針(魚肉共)								1, 0,(1)		1, 0, (1)	
貨幣 { 1 円		3, 0,(3)	1, 0,(1)							4, 0, (4)	非 食
5 円		1, 2,(3)								1, 2, (3)	
1 円	1, 0,(1)									1, 0, (1)	
針 金	0, 1,(1)									0, 1, (1)	
笛 (金属製)		1, 0,(1)								1, 0, (1)	食
ペ ン 先	1, 0,(1)									1, 0, (1)	
時計の歯車		1, 0,(1)								1, 0, (1)	餌
ビ ン		0, 2,(2)								0, 2, (2)	
待 針			0, 1,(1)	0, 1,(1)						0, 1, (1)	性
縫 針										0, 1, (1)	
エ ン ピ ッ ク }			1, 0,(1)							1, 0, (1)	
サ ツ 鉗 }					1, 0,(1)				1, 0,(1)	2, 0, (2)	
釘							1, 0,(1)			1, 0, (1)	
基 石	2, 0,(2)									2, 0, (2)	
計	4, 1,(5)	6,5,(11)	2, 0,(2)	1, 2,(3)	4, 1,(5)	1, 2,(3)	3, 1,(4)	1, 4,(5)	3, 1,(4)	25,17, (42)	

これば食道異物の 47.6% にあたる。この 20 例は年令的にみると、すべて 10 才台以上に分布している。これに対し非食餌性の異物は 22 例あり、この 22 例のうちから、画紙の 2 例 (20 才台, 60 才台男子)、待針 (10 才台女子)、釘 (40 才台男子) 計 4 例を除くと、すべて 9 才台以下の症例である。食餌性異物が 9 才以下に全くみられなかったこと、非常によい対照をなしている。

異物の介在部位は、非食餌性異物 22 例中 21 例は第Ⅰ狭窄部位にあり、1 例 (縫針) が第Ⅱ狭窄部位にあつた。食餌性異物では、第Ⅰ狭窄部位が多いが、第Ⅱ、第Ⅲの狭窄部位迄下がつていたものもかなりみられる。全体としてみればやはり第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ狭窄部位の順になっている。

又食餌性異物中、牛肉、鳥賊の 3 例中 2 例、餅の 4 症例には、食道痙攣症があり、そのために異物となつたものとする。このうち、牛肉例と鳥賊 1 例は同一例で間をおいて異物となり摘出したものである。

前述したように食餌性異物の大部分は 20 才以上に (10 才台 2 例) おこつており、これに反し、非食餌性異物は 4 例を除いてすべて 9 才以下であつたことは興味深いことである。又食道異物のかなりの率をしめる義歯例は全くみられなかった。

Ⅸ 無自覚性異物

前述したように、耳・鼻腔異物のうち、異物の存在 (侵入、挿入等をふくんで) に気付かず、特に異物の除去を目的でなく外来をおとずれた異物が本統計で非常に多いのに気付いた。このようなことが今迄の異物統計でどの位の頻度にあるかと文献にこれを求めてみたが、みた範囲内での本邦文献でこのような分類をしているものはみられなかった。一般的な記載で、このような無症状にすぎず異物、存在をしられない異物があることを指摘している文であつた。であるので一応これらの異物は無自覚性異物と仮称し、今少しこれらについて考察を加えてみる。

第 13 表

	0～	2～	5～	10～	20～	30～	40～	50～	60～	計
耳 鼻	0, 3, (3)	4, 2, (6) 10, 11, (21)	5, 6, (11) 1, 1, (2)	15, 4, (19) 0, 1, (1)	3, 4, (7)	4, 4, (8)	1, 0, (1)	1, 3, (4)	1, 0, (1)	34, 23, (57) 11, 16, (27)
計	0, 3, (3)	14, 13, (27)	6, 7, (13)	15, 5, (20)	3, 4, (7)	4, 4, (8)	1, 0, (1)	1, 3, (4)	1, 0, (1)	45, 39, (84)

63 ← → 21

無自覚性耳異物は第5表に示すように、年令的分布は2才より60才台に及んでいる。その最大の山は10才台にあり(19例)10才台以下は36例63.15%占めている。

又、無自覚性鼻腔異物は第7表のように、年令的分布は0才より10才台までであり、その最大の山は2～4才台21例となり、耳のそれに較べ若年層にずれている。

20才台以上は全くみられない。

又前述した如く、耳異物の28.5%、鼻腔異物の50.2%が無自覚性のものである。

第5表、第7表をまとめてみると、第13表に示すように、全例84例中63例迄が10才台以下であり、75%を占めている。全異物のうち10才台以下のものは212例あり、そのうち無自覚性のものは略30%をしめている。ことに耳での多数を占める10才台では全異物(10才台での)65例中20例が、又鼻腔での多数を占める2～4才台では全異物78例中27例が無自覚性のものであることに気付く。このことは幼小児の診療にあたり注意すべきことと考える。

又異物の種類は、紙片、綿花、虫をはじめとして、小石、ガーゼ、豆、種子、糸、木の葉、等と18種が数えられた。

鼻腔無自覚性異物の全例が一侧鼻閉、悪臭鼻漏、を主

訴として来院してをり、耳の無自覚性異物はその症状はさまざまで、全く無症状のものから、耳鳴、難聴、耳閉塞感、更には耳漏(悪臭あり)、耳痛、頭痛、耳後部腫脹とその症状は千差万別であつた。又これらの多くが耳掃除、診療行為に原因があると考えられる綿花、紙片であることも一考に値しよう。

又前述の如く、無自覚性耳異物症例中12例21.05%が何らかの中耳炎合併症をおこしており、更にそのうち5例は頭蓋内合併症をおこしていた。この5例中4例は中心穿孔性のものであつた点に注目したい。又見方をかえると、10カ年間の全耳性頭蓋内合併症11例、仮性真珠腫7例、中心穿孔型4例中無自覚性異物によるものは5例(48.1%)あり、しかもそのうち4例は中心穿孔性のものであつた。又、中耳炎合併症52例中、上鼓室型38例中3例に、中心穿孔型14例中9例(64.25%)に無自覚性異物があつたことである。合併症52例中12例21.9%は無自覚性異物によるものであり、中心穿孔型に限れば14例中9例がこれによつておこつたと考えてよいであろう。

X 食餌性異物

咽頭・喉頭・食道異物中、食餌性のものと考えられるものをとりあげてみた。118例がえられ、これの内訳は

第 14 表

		2～	4～	10～	20～	30～	40～	50～	60～	70～	80～	男	女	計
魚	咽喉食	1,0,(1)	3,2,(5)	6,4,(10)	16,11,(27)	6,7,(13)	6,7,(13)	1,4,(5)	4,2,(6)		0,3,(3)	43	40	83
				0,1,(1)	2,2,(4)		1,1,(2)	0,1,(1)	1,1,(2)	1,0,(1)		5	6	11
				1,1,(2)	2,1,(3)	1,2,(3)		0,1,(1)	1,1,(2)			5	6	11
骨	計	1,0,(1)	3,2,(5)	7,6,(13)	20,14,(34)	7,9,(16)	7,8,(15)	1,6,(7)	6,4,(10)	1,0,(1)	0,3,(3)	53	52	105
ソノ	咽喉食			1,0,(1)		0,1,(1)	1,0,(1)	0,1,(1)				1	1	2
					1,0,(1)	2,1,(3)	1,3,(4)	1,0,(1)				1	1	2
他	計				1,0,(1)		2,1,(3)	1,3,(4)	1,0,(1)			5	4	9
				1,0,(1)	1,0,(1)	0,1,(1)	3,1,(4)	1,4,(5)	1,0,(1)			7	6	13
総	計	1,0,(1)	3,2,(5)	8,6,(14)	21,14,(35)	7,10,(17)	10,9,(19)	2,10,(12)	7,4,(11)	1,0,(1)	0,3,(3)	60	58	118

第14表にあるように、魚骨が105例と圧倒的に多数であり、魚骨以外のものは13例にすぎなかった。又、咽頭では93例中85例が、喉頭では14例中13例が、食道では42例中20例が食餌性異物であった。年令的には20才台の35例を最高に、幼・老年では激減している。

今これを魚骨についてみると、105例中咽頭は83例79.04%となり、喉頭・食道はそれぞれ11例宛であった。年令的には10才台より40才迄で78例73%を占め、それより年令の上下するにつれ減少している。性別では男子53、女子52と大差なく、各年代においても差はまずない。

異物となつた魚骨の大部分は小骨であり、脊椎骨の異物のごく少数であった。

魚骨以外の食餌性異物は13例であり、咽頭2例、喉頭2例、食道9例と、魚骨の場合とは逆に食道が75%と3/4を占めている。又年令的には10才台より60才台

にわたるが、40才台(4例)50才台(5例)と比較的高年令層に多くなっている。性別では男子7例、女子6例で差はない。

異物の種類は、貝柱、昆布、茶の葉、蜜柑、牛肉、煮干、餅、海老の殻、魚肉についた釣針等があげられた。

D. 文献的考察

耳鼻咽喉科領域の異物統計について文献にもとめてみた。

まず異物全体の統計については、大学教室の統計が多く、一般病院のものは僅かであった。その詳細な記載のあるものと我々の統計と比較してみるため(第15表)、鹿児島大学²⁾、九州大学³⁾、名古屋大学⁴⁾、熊本大学⁵⁾、宇和島病院⁶⁾、門司鉄道病院、伊田病院、高岡農協病院⁷⁾をとりあげてみると、その実数は観察期間の不同のために非常にひろまりがあるが、その異物の発生部位でみると教室と病院の統計では著明な差がでた。教

第 15 表

	名古屋大	熊本大	九州大	鹿児島大	高岡病	宇和島病	門司鉄病	伊田病	京城府病	武蔵野病
統 計 年 数	20	10	1	29	12	4	5	6	4	10
総 数	403	180	30	640	244	65	83	204	232	413
男 子		114				44				202
女 子		66				21				211
発 生 頻 度						0.7%				0.93%
耳	25	28	1	169	105	20	28	90	85	200
鼻	28	18	3	53	28	12	17	21	33	53
咽	39	20	5	83	38	19	29	62	56	99
喉	9	3	0	12	1	2	1	3	0	14
気	23	24	11	69	9	1	2	5	1	5
食	279	87	10	254	63	11	2	20	38	42

室の統計では異物の大部分を気管・食道異物で占められているのに対し、病院では耳・鼻の異物が圧倒的に多いことである。このことはすでに多くの著者が指摘していることであるが、気管・食道異物では病院は教室の1/3～1/10であることに注目される。

耳異物についての統計はすべて戦前のもので最近のものはみられなかった。内容的には若年が多いこと、有生異物の多いこと等は我々の統計と同じであるが、嚙の多いことが目立っている⁸⁾。山本⁹⁾¹⁰⁾によれば鹿児島大学19年間に耳異物359例あり、男244女115となつてをり、男子が2倍以上となり、我々の男女同数とことなっている。過半数は10才以下で、ことに1才～5才に多いこ

とは我々のと一致する。小児では豆、嚙が高年ではマツチ棒が多いという。又重複異物としては、同種のもの15例、異種のもの13例、両耳にあつたもの16例が報告されている。介在期間としては1年以上のものが22例、又異物に気付かず他の症状で来院したものが115例(45%)あるという。我々のいう無自覚性異物というような記載はないが、これらの他の症状で来院したものは同じものをさしていると考えたい。又1例異物のために乳突類をおこした例があつた。

鼻腔異物について詳細な記載のあるのは山本¹¹⁾の報告文であった。これによると、19年間に84例の鼻腔異物

があり、男子49女子35であり、3～6才に多く、12才以上にはなく、又4才34例のピークがみられた。異物としては、豆、紙片が多く、その他に種子もかなりあった。介在期間は大多数は10日以内であるが、数年から10年に及ぶものもあった。かなりのものが異物に気付かず、悪臭鼻漏、鼻閉を訴えてくるというが、その詳細は記載がなかった。この一連のものが、我々の無自覚性鼻異物であろうと考える。

鼻咽腔異物については今迄に16の報告、(18例)があったが、年令的には1～4才が多く、異物は金属性・鈣物性のものが大部分であった。我々の統計にみられるような木の葉等は数例であった。梶川・清水¹²⁾は、上咽頭異物になるためには、その形が特別であることが必要だというが、この点について、我々の木の葉は一定方向には進みやすいが反対方向には抵抗しひつかゝるため、嚥下運動等によつて、異物はおのずから上咽頭に進入していつたものとする。

硬口蓋異物の1例をえたが、昭和31年に吉岡・滝本¹³⁾が11才男子にみられた1例を報告しているのが文献上唯一のものであった。

咽頭異物についての文献はみあたらなかった。総合的な異物統計上のものをみると、一般病院の方が大学教室におけるものよりやや多いが、大差なく、咽頭異物の種類、年令等については検当できなかった。

喉頭異物についても、個々の症例の報告はかなりあり、又魚骨が多いとの記載はあるが統計的なものではなく詳細の比較はできなかった。

食道異物についての報告は他異物にくらべ非常に多数の統計が報告されている。その大要は、幼児より老年に到る迄発生するが、幼児により多く、又幼児では貨幣が、老年では義歯症例がめだっている。

気管異物についても統計的報告は多数みられた。年令的には幼児に多く、異物としては豆等が多くなっている。我々の統計では幼児のみで、それ以上の年令層のものはみられなかったが、成人以後のものもかなりあることは衆知のことである。

魚骨異物の統計がみられたが、咽頭・食道・喉頭の順になつてをり、青壮年層に多いという。我々は魚骨をはじめとし、更に広く食餌性の異物を統計的にみたのは前述の通りである。

一般的にいつて、気管・食道異物をのぞいては余り詳細な統計はみられなかった。

E. 結 語

武蔵野赤十字病院耳鼻咽喉科での、昭和24年12月20日より昭和34年12月末日迄の異物症例を統計的に観察し次のような結果をえた。

1. 異物症例数は413例で発生頻度は0.93%を示めし

ている。

2. 413例の異物症例のうちわけは、外耳炎200例、咽頭93例、鼻腔53例、食道42例、喉頭14例、上咽頭5例、気管5例、硬口蓋1例であった。

3. 年令的にみると、2才～4才の78例を最多とし、20才合67例、10才～19才65例、次いで30才合、5～9才合、40才合、0～0.9才、50才合、60才合、の順に減少している。

4. この統計をとつて気付いたことは、耳異物、鼻腔異物中に無自覚性のものがあり、しかもそれがかなりの高率にあることであつた。

耳無自覚性異物は57例あり、全耳異物の28.5%にあたり、又鼻無自覚性異物は27例あつて、全鼻腔異物の50.3%を占めていることである。

5. 耳無自覚性異物のうち、少数ではあるが中心穿孔性中耳炎を増悪され耳性頭蓋内合併症をおこしたものがあることは注目され、しかも頭蓋内合併症中の中心穿孔性中耳炎によるものゝ大部分を占めていることは注意をばらうべきであらう。

6. 文献上記載少ない上咽頭異物5例がみられ、それがすべて木の葉であり、乳幼児におこつたものであつた。

7. 硬口蓋異物も文献上1例しかえられなかった。

8. 気管異物中には死亡したものであるが、おがくずによる稀有な1例があつた。

9. 文献的に大学耳鼻咽喉科学教室、少数の病院における異物統計と比較し、大学と病院とにおける異物の差についてのべた。

文 献

- 1) 佐藤、千葉、岡、井上：耳鼻科、30；667、昭33。
- 2) 須古：熊本医学会誌、32；1460、昭33。
- 3) 井上、武田：日耳鼻、61；1399、昭33。
- 4) 岩田：大日耳鼻、41；616、830、昭10。
- 5) 鶴野：耳鼻科、10；473、昭12。
- 6) 遠藤：耳鼻臨、36；828、昭16。
- 7) 米丸：日耳鼻、61；1402、昭33。
- 8) 本多：長崎医学会誌、13；1156、昭10。
- 9) 山本：耳鼻科、10；412、昭12。
- 10) 山本：鹿児島医学会誌、12；352、昭18。
- 11) 山本：耳鼻科、8；506、昭10。
- 12) 梶川、清水：日耳鼻、61；1718、昭32。
- 13) 吉岡、滝本：歯界展望、13；333、昭31。

稿を終るにあつて、当院耳鼻科開設以来種々の御指導をして下さつた増田胤次東京大学名誉教授に厚く感謝の意をさしげると共に、歴代の各耳鼻科医長、医員諸先生方の御行跡に深く敬意を表するものであります

(原稿到着＝昭和36.1.18日)